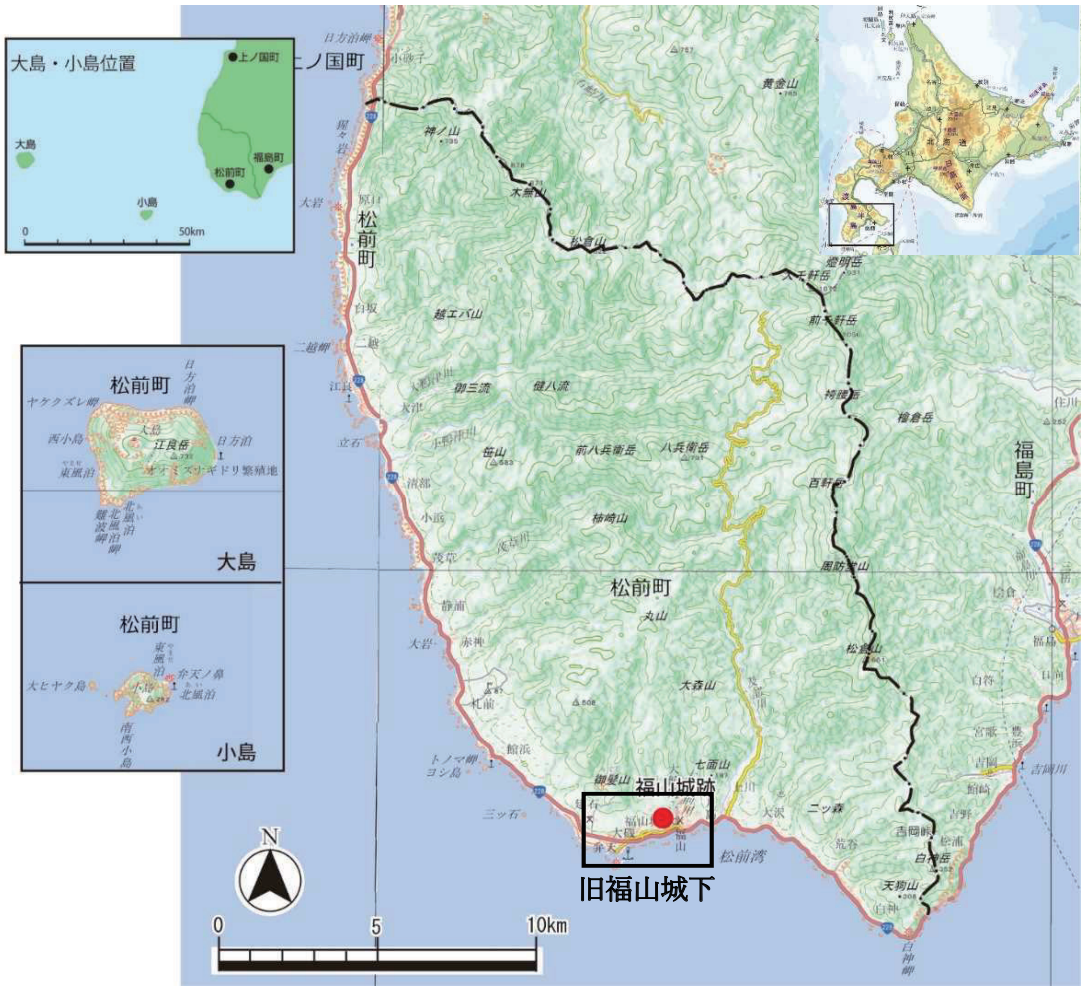
近世福山城下における防疫と信仰

佐　藤　　雄　生

1. はじめに

令和元年（2019）12 月に新型コロナウイルスが世界的な流行をみせてから、はや 4 年が過ぎようとしている。この間、ワクチンが開発されて予防接種が行われながらも、ウイルスの変異などにより依然として人類にとっては脅威となる感染症であることに変わりはない。

近世日本の最北に位置し、蝦夷地唯一の藩であった松前藩。その政庁である福山城を中心として、東西 2km の海岸沿いに広がる福山城下では、感染症が深刻な「災害」の一つであった。本稿では、近世墓標や過去帳、祈願札、松前藩の史書や日記類から、松前町旧福山城下で行われていた防疫と信仰を紹介する。



第 1 図　旧福山城下位置図

2. 福山城下の人口と感染症の流行

福山城下は、松前藩領を代表する三つの交易港、いわゆる松前三湊（松前・江差・箱館）の筆頭であり、交流人口が多かった。近世墓標や過去帳の調査によって、南は薩摩から北は津軽・南部まで、全国各地から人々がやってきたことがわかっている（関根編　2010）。

松前藩の官撰史書『福山秘府』によると、福山城下の人口は宝永四年（1707）に 4,079 人であったが、63 年後の明和七年（1770）には 5,883 人と、およそ 1.4 倍に増加している。さらに、『蝦夷地御用立会御勘定方帰府之上差出候書面類留』（阿部家文書）によると、松前藩の梁川移封直後の文化五年（1808）の人口は 7,084 人となっており、福山城下が幕府直轄地となったことで人口の流入があったことがうかがえる。同書によると、幕府直轄期の人口はほぼ横ばいであるが、『東西蝦夷地人別并収納高除金高扣』（伊達家文書）によると、松前藩が復領した文政五年（1822）には人口 8,935 人とさらに増加しており、これは蝦夷地の沿岸防備のための足軽を多く召し抱えたことに起因すると考えられる。

『番日記』（林家文書）では安政六年（1859）の時点で人口 11,831 人と一万人を超え、文久二年（1862）には 12,255 人となっている。東西約 4km、可住地面積約 2 k ㎡の狭隘な城下町に一万人を超える人口を抱え込み、日常的に全国各地から船舶の出入りがあることから、感染症拡大を回避することは困難であったと考えられる。

写真 1　旧福山城下の範囲

【国土地理院による昭和 51 年（1976）8 月 29 日撮影の航空写真（CHO7621-C19-4）を加工】

さて、徐々に人口が増加していった福山城下であるが、流行した感染症を整理すると、次のようになる。

表１　近世福山城下で流行した感染症の主な記録

和暦	西暦	記事	典拠
元和元年	1621	夏麻**疹流**行し幼者多く死す。	松前家記
寛永元年	1624	初夏より**痘疹**発して万民の子供残り少なく死す。	新羅之記録
万治元年	1658	春夏**疱瘡**流行し、死者多し。	福山秘府（和田家本）
宝暦三年	1753	この年秋**麻疹**流行し死者多し。	福山秘府（和田家本）
安永六年	1777	この年**麻疹**流行。	福山秘府（和田家本）
安永八年	1779	この年**疱瘡**流行。	福山秘府（和田家本）
享和三年	1803	六月十三日　昼御用召にて大奥へ詰候処、夕方までに段々**はしか**にて死人あり。	白鳥家日記
文化五年	1808	**疱瘡**流行。	和田家諸用日記
文政十年	1827	七月二十三日　此節流行の**風病**蔓延に付、疫神祓社家中、城中ならびに市中通行これあり。	和田家諸用日記
文政十一年	1828	十一月三日　**疱瘡**流行について御祈祷七社に申付け、八幡社に於て修行。	白鳥氏日記
安政元年	1854	十一月　**疱瘡**、**麻疹**流行。	湯浅此治日記
元治元年	1864	九月二十三日　**疱瘡**流行に付、安全神楽を願うもの多し。	佐々木家日記

こうしてみると、記録としては、疱瘡（天然痘）や麻疹（はしか）が多いことがわかる。風病とはインフルエンザを指すものであろうか。

福山城下に残る近世墓標と過去帳の中には、疱瘡により亡くなったことを示す「疱」あるいは「瘡」の文字を持つ 12 名の戒名が確認できる（関根編　前出）。それらはいずれも子どもであり、表 1 に示した流行年と突合せると、安政元年（1854）に 4 名、元治元年（1864）に 2 名が亡くなっている。

なお、曹洞宗松前山法源寺『法源寺過去帳』によると、寛政十年（1798）十一月から翌年まで疱瘡流行による死者が記録されている。寛政十年の死亡者は 29 人、うち 6 人が子どもで死亡者の 21 パーセント。寛政十一年の死亡者は 55 人、うち 32 人が子どもで死亡者の 58 パーセントと、小児の被害が多い（松前町　1988）。

写真２　文政七年（1824）没の疱■童女（正面―背面）

写真３　元治元年（1864）没の疱■孩子

（写真２・３ともに松前町の正行寺に所在）

3. 福山城下における防疫措置

こうした疱瘡の流行に対し、文政七年（1810）には、ロシア勾留中に医師の従僕として随行しながら種痘術を身に付けた中川五郎次が、福山城下と箱館において予防接種を行った。これは、確認されている限り本道最古の種痘術であり、近代予防医学の先駆けと言える。

五郎治の種痘術は、松前藩医・桜井小膳をはじめとした医師らに伝授された。『佐々木家日記』（佐々木家所蔵）によると、安政元年（1854）には疱瘡による子どもの死者が多かったことから、九月一日付で松前藩の寺社奉行から種痘術を行うよう触書が出された。この予防接種は同月三日、十日、十七日、二十四日に桜井小膳宅へ出向き種痘術を受けることとされている。

この他、感染拡大地域における移動制限も行われていたことが『白鳥氏日記』（函館市中央図書館所蔵）に記されている。福山城下から東へ約 20 ㎞離れた福島村（現在の福島町）において、文化 13 年（1816）に疱瘡が流行した際、村中からの旅立差止めが行われたという（松前町 1988）。

福島村は、福山城下近在の集落でも 500 人弱という比較的規模の大きい村であり、城下への感染症の流入を防ぐためにも物理的接触の回避が図られたのであろう。

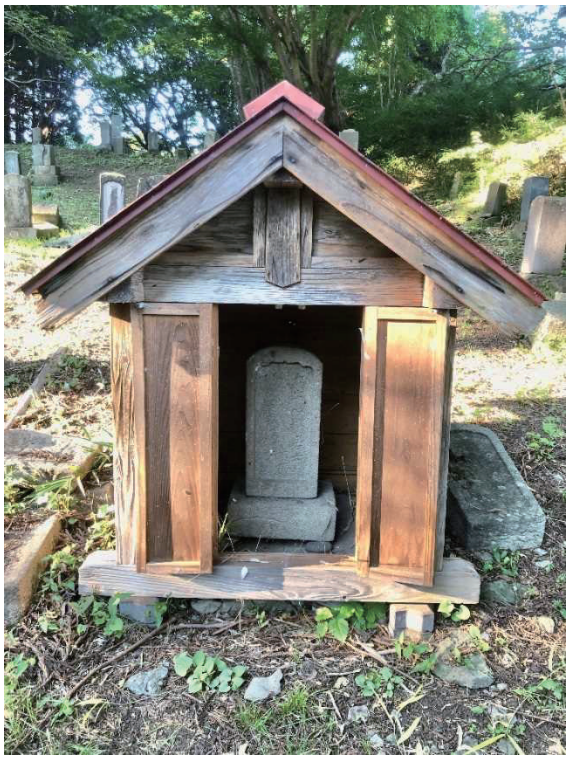


写真４　中川五郎次が祀られている墓標(法源寺)

『白鳥氏日記』文化十三年二月の条

【翻刻】

一　二十九日　福島ヨリ之飛脚夕方帰ル、書状
披見致候所、村方疱瘡流行、村中ヨリ差留
申二付参リ兼ル由申来候故

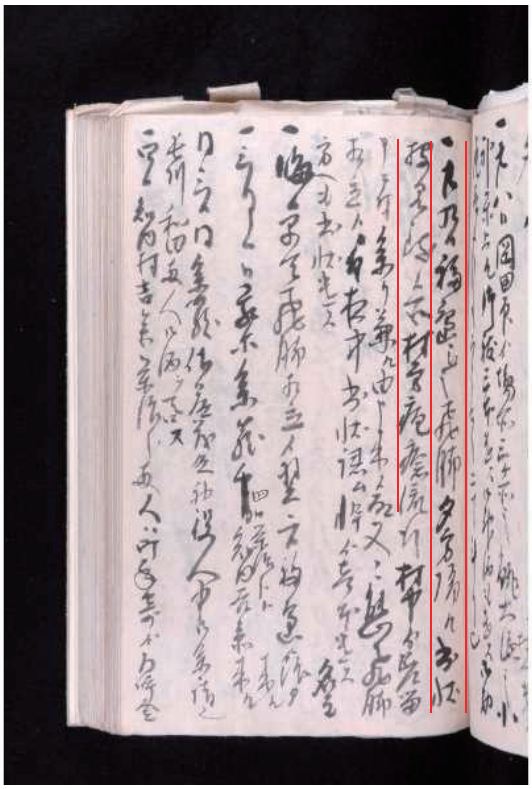


写真５　『白鳥氏日記』（函館市中央図書館所蔵）

4. 疱瘡除けと病気平癒への祈り

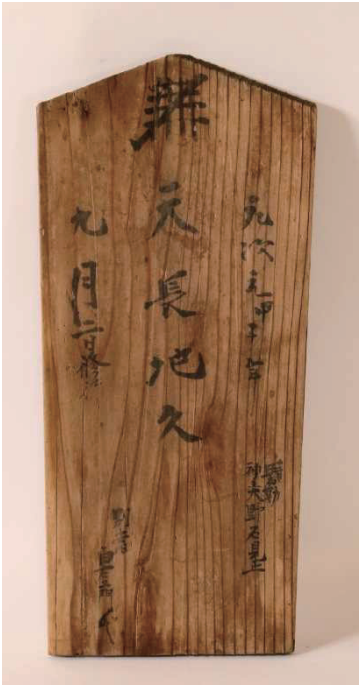
一方、前述の防疫措置とは別の営みがあったことを祈願札から知ることができる。福山城下から東へ約６㎞、荒谷村（現在の松前町字荒谷）の高台に鎮座する荒谷稲荷神社には、明和二年（1765）～昭和四十六（1971）までの祈願札・棟札が 28 枚伝わっている。このうち一枚の祈願札に、「奉再建立八郎大明神本殿壹宇　成就之攸」、「天下泰平　國家安全　村中静謐　疱瘡安全」と記されている。裏面の日付は「元治元年九月二日」、まさに福山城下で疱瘡が流行した年である。

八郎大明神とは、平安時代の武将・鎮西八郎源為朝である。保元の乱に敗れて伊豆大島へ流刑となるも、そこで武勇を発揮して伊豆諸島を支配し、さらに八丈島に渡り疱瘡神を退治したという伝説から、疱瘡除けの神として信仰を集めた。疱瘡の流行に襲われた荒谷村の人々は、八郎大明神の社殿を再建し、疱瘡平癒を祈願したのである。

祈願札には再建とあることから、それ以前に八郎大明神を勧請していることになるが、詳細は不明である。参考までに、文久元年（1861）に上梓した市川十郎による『蝦夷実地検考録』（函館市中央図書館所蔵）では、福山城下の稲荷社（西館稲荷社か）の項に「八郎明神」とあって、草創は享保九年（1724）とされる。荒谷村に勧請されたものとの関係までは記されていないものの、松前藩領において疱瘡除けの神が信仰されていたことを示す記録である。

写真６　荒谷稲荷神社
（現在、八郎大明神の社殿は確認できない）

吐普加身　　祭主大神主　佐々木正親源延利
天下泰平　国家安全
奉再建立　八郎大明神　本殿壹宇　成就之攸
村中静謐　疱瘡安全　　願主　富吉　長兵衛
依身多女　　大工　辰三郎



元治元甲子年　時助勤　神主大野石見正
天　長　地　久
九月二日修行　別当　由右衛門氏

写真７　荒谷稲荷神社に残る祈願札（表―裏）

また、松前藩では、疫病の流行に際して領内の寺社に対して疫神退散の加持祈祷を執り行わせている。中でも現在まで続くものに松前神楽がある。『佐々木家日記』には、元治元年（1864）七月二十三日に、炭焼沢村（現在の松前町字白神）において疫神退散御神楽修行が執り行われたとあり、同年九月二十三日には疱瘡流行につき安全神楽を願うもの多し、という記事がある。これは松前神楽のうち、病気平癒や病魔祓いの演目である「七五三祓舞」や「獅子舞」を含む一連の神楽奉奏と考えられる。

写真８　松前神楽「七五三祓舞」

写真９　松前神楽「獅子舞」

5. おわりに

本稿では、近世福山城下における感染症拡大に伴う防疫と信仰を紹介した。

18世紀以前の記録は少ないため感染症への具体的な対策はつかめないが、19世紀以降については、中川五郎次が確立した種痘術による予防接種や、近隣の流行地域からの移動制限といった防疫を講じている。そして、防疫と並行して、疱瘡除けや病気平癒を神仏に祈るという営みが存在していた。

福山城下は、海岸段丘に貼り付くような狭隘な土地にも関わらず多くの人口を抱え、北前船に代表される交易の結節点として多くの船舶の出入りがあり、したがって人の往来も活発であった。こうした条件のもと、飛沫感染や空気感染、接触感染により疱瘡や麻疹、流行風邪などの感染症が拡大していったことは想像に難くない。

引用・参考文献

久野俊彦　1993「為朝伝説の生成と成長」『伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌』　pp696-713　伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌編纂委員会

草川隆　1957「疱瘡の話」『民俗』第 26 号　pp.7　相模民族学会

松木明知　2009『中川五郎次とシベリア経由の牛痘種痘法』北海道出版企画センター

永野正宏　2022『北海道天然痘流行対策史―アイヌ民族と安政年間の種痘を中心に』北海道大学出版会
野沢信義　1988『蝦夷地の医療』北海道出版企画センター
松前町　1984『松前町史』通説編　第一巻　上　pp.1033-1036
松前町　1988『松前町史』通説編　第一巻　下　pp.1058-1061
松前町　1997『松前町史』年表
関根達人編　2010「５. 近世墓標にみる人口動態」『近世暮と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究』平成 19 年度～21 年度　科学研究補助金（基盤研究（Ｂ））研究成果報告書　pp.136-142

Prevention of epidemics and faith in Fukuyama Castle Town in the early modern period

SATO Yuki

Abstract

This paper introduces Prevention of epidemics and faith associated with the spread of infectious diseases in the castle town of Fukuyama in the early modern period.

Since there are few records before the 18th century, specific measures against infectious diseases are unknown. However, from the 19th century onwards, it was found that preventative measures were taken, such as vaccination with smallpox vaccination established by Goroji Nakagawa and restrictions on movement from nearby epidemic areas. In parallel with epidemic prevention, there was also the practice of praying to gods and buddhas to ward off smallpox and cure illnesses.

Fukuyama castle town had a population of 7,000 to 10,000 people despite its extremely narrow land. In addition, as a hub for the Kitamae-bune trade, many ships were coming and going, and people came and went briskly.

Under these conditions, it is not hard to imagine that infectious diseases such as smallpox, measles, and epidemics spread due to droplet infections, airborne infections, and contact infections.